

経 済 情 勢

国 内

国内最終需要は全体として引続き伸び悩んでいるが、生産は輸出の増勢や製品在庫の調整一巡を背景に増加傾向にあり、商品市況もこのところ底固さを増している。

設備投資は、依然低迷の域を脱していないが、大企業を中心に繰延べの動きはおおむね一巡しつつある。一方、公共事業契約額や住宅着工は前年を下回る水準にとどまっている。個人消費関連では、所得の伸び悩みは続いているが、百貨店売上げが夏物衣料等季節商品を中心に持直し傾向を示したほか、耐久消費財の売行きも乗用車や一部家電の好調持続に加え、エアコンなど季節商品が好伸した。この間、主要企業製造業の企業収益は、58年度上期は横ばい圏内の動きのあと、下期はかなりの増益が見込まれている。こうした状況下、企業の業況判断も幾分改善しており、先行きについては停滞感がかなり薄れると期待されている。

8月の商品市況をみると、海外市況高を映じて非鉄、食料品が続伸したのをはじめ、在庫調整の進捗や輸出の増加から鉄鋼、繊維が上昇するなど、全体としてかなり上昇した。一方、8月の卸売物価は、輸出物価ならびに輸入物価が為替円安などから上昇したものの、国内物価が一部石油製品(C重油)の値下げ実施を主因に下落したため、総合では低下した。また消費者物価(東京)も、生鮮食品が上昇したものの、夏物衣料の値下りから下落した。

金融面をみると、7月のマネーサプライの前年比伸び率は前月上昇のあと低下した。この間、銀行貸出約定平均金利は低下傾向を続けた。また8月の公社債市況は、月央以降、米国金利の上げ一服などから強含み、月中では小幅上昇となった。

7月の国際収支をみると、経常収支(貿易収支季節調整後)は、輸入が前月増加の反動もあって減少したため再び黒字幅を拡大した。一方、長期資本収支は、引続き大幅な流出超となった。8月の円相場(対米ドル直物相場)は、月央にかけて米国金利が上昇するなかで軟化、その後一時反発したものの月末にかけて再び弱

含み、月中ではかなり円安となった。

生産、出荷は増加傾向

7月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比*、速報)、同出荷(速報)は前2ヵ月増加のあとそれぞれ横ばい、 -0.5% となったが、ならしてみれば引続き増加傾向にある(前年比は $+2.2\%$ 、 $+1.9\%$)。

* 以下増減率は特に断らない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

当月の財別動向をみると、建設材(セメント・同製品、小棒)の出荷が前月に続き減少をみたほか、一般資本財(土建機械)、非耐久消費財の生産、出荷も減少したが、耐久消費財(乗用車、VTR、エアコン)の出荷が大幅に増加したほか、生産財も輸出の増加(鋼材、化学繊維)や加工メーカー筋の手当て増大(半導体、プラスチック)から生産、出荷とも引続き増加した。

この間、生産者製品在庫(速報)は $+0.2\%$ とわずかながら引続き増加した。これは、石油製品の生産の振れによる一時的積上りや需要好調の電気機械での在庫積増しの動きなどによるもので、調整が遅れていた繊維などでは引続き在庫減少をみた。

なお、8月時点調査の日本銀行「企業短期経済観測」によれば、主要企業製造業の7~9月の生産、売上げは、輸出の増勢持続やそれに伴う関連メーカーの資材手当て増などを背景に回復が見込まれており、10~12月にかけても緩やかな増加が予測されている。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関係では、7月の機械受注額(船舶、電力を除く民需)は、前2ヵ月増加のあと -10.0% となった。また、建設工事受注額(民間分、速報)も、前2ヵ月大幅増加のあと -4.3% の反動減となった。

なお、前記「短観」によると、主要企業(全産業)の58年度設備投資計画は、前年度比横ばいとなっている(57年度実績 $+0.5\%$)。鉄鋼、造船、一般機械等での減額修正の動きはおおむね一巡したが、増額の事例は電気機械等一部の業種にとどまっている。この間、中小企業(製造業)の58年度設備投資計画は、輸出関連業種を中心に例年に比べ厚目に増額修正する動きがみられるが、現時点での計画は前年度比 -8.3% と依然低い水準にとどまっている(57年度実績 -12.0%)。

7月の公共事業契約額(前年比)は、 -18.0% と引続き前年水準を下回った(前月 -8.1%)。

7月の住宅着工戸数(前年比、速報)は、民間資金分が貸家を中心に引続き伸びを高めたものの、公的資金分が大幅に落ち込んだため、全体では -3.4% と再び前

年水準をかなり下回った(前月-0.1%)。

個人消費関係では、7月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は、中元商戦が前月の出遅れを取戻してまずまずの推移を示したほか、早目の夏物バーゲンセール実施や暑気本格化に伴う季節商品の売上げ増加などから+3.7%の伸びとなった(前月-0.5%)。また8月入り後の都内百貨店売上高も、夏物衣料を中心に前月に続き持直し気味に推移した模様である。8月の耐久消費財の売行きをみると、ステレオ等音響機器は依然低迷を続けているものの、VTRが引続き順調に推移したほか、エアコン、扇風機などの季節商品や冷蔵庫が好伸した。また、乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)も、車検期間延長(7月)前の買控えの反動に加え新車種の売行き好調もあって+13.2%と引続き高い伸びとなった(前月+16.8%)。

雇用動向をみると、7月の所定外労働時間は+2.8%と製造業を中心に引続き増加したが、常用雇用は-0.1%と再び減少し(前月+0.2%)、有効求人倍率も0.57倍とわずかながら低下した(前月0.58倍)。この間、完全失業率は2.51%と2ヵ月連続の低下となった(前月2.58%)。

なお、前記「短観」によると、企業収益(主要企業製造業、経常利益、石油精製を除く)は、58年度上期は横ばい圏内の動き(前期比+1.8%)のあと、下期については、売上げ増加に伴う固定負担の低下や市況の持直しなどから+23.2%の増益が期待されている。

商品市況は上昇

8月の商品市況をみると、非鉄(亜鉛、アルミ)、食料品(大豆、砂糖)が海外市況高を映じて続伸したのをはじめ、鉄鋼(棒鋼、H形鋼)、繊維(綿糸)も在庫調整進捗や輸出増から上昇、また建材、化学製品も下げ止まるなど、全体としてかなり上昇した。

8月の卸売物価は、輸出物価が為替円安から、また輸入物価も為替円安に加え食料品・飼料の値上りなどからともに上昇したものの、国内物価がC重油の値下げ実施を主因に下落したため、総合では-0.2%と低下した(前年比-2.9%)。

8月の消費者物価(東京、速報)は、生鮮食品が上昇したものの、夏物衣料のバーゲンセール本格化から-0.4%と低下し、前年比でも+1.3%と再び1%台となった(前月同+2.5%)。

貸出金利は引続き低下

8月の金融市場をみると、銀行券は5,769億円の還収超と前年(同1,922億円)を

上回る還収超となり、月中平均発行残高(前年比)は+4.8%と前月(+5.0%)を下回った。一方、財政資金は、一般財政の払超幅が前年を上回ったうえ、国債発行額が前年を下回り、また外為会計の揚超幅も前年比縮小したため、全体では2,924億円の払超となった(前年は5,955億円の揚超)。この結果、前年(3,245億円の資金不足)とは様変りに10,240億円の大幅資金余剰となり、日本銀行は貸出の回収によってこれを吸収した。

この間、コールレート(無条件物)は、上記のような資金余剰地合を反映して月中0.125%低下し、6.4375%で越月した。一方、手形レート(2ヵ月物)は、買手筋の先高期待に伴う出合い難を背景に微騰となった(月中+0.0625%、月末水準6.75%)。

7月のマネーサプライ(M₂+CD平残、前年比)は、前月上昇のあと+7.1%と低下した(前月+7.7%)。この間、7月の銀行貸出約定平均金利(都銀、地銀、相銀平均)は、資金需要の落ち着きを背景に長期、短期とも引続き下落し、月中では0.014%の低下となった(月末水準7.092%)。

8月の公社債市況をみると、月央にかけて円相場の軟化などから弱保合いで推移したが、その後は米国金利の上げ一服などから強含み、月中では小幅上昇となった。もっとも、新発国債の応募者利回りは流通利回りをなお下回っていたため、9月発行長期国債の応募者利回りの引上げが決定した(引上げ後利回り7.994%)。この間、株式市況は、景気回復期待の強まりなどを背景に上伸した(東証株価指数月末678.53、月中+12.99)。

経常収支は大幅な黒字

7月の国際収支をみると、経常収支(貿易収支季節調整後)は、貿易外収支の赤字幅は拡大したものの、貿易収支が輸入の反動減などから黒字幅を拡大したため、21.2億ドルの大幅黒字となった(前月同14.0億ドル)。一方、長期資本収支は、本邦資本が対外証券投資を中心に引続き高水準の流出超となったうえ、外国資本の流入超幅も縮小したため、全体では18.0億ドルの赤字と引続き大幅の流出超となった(前月同16.2億ドル)。この間、総合収支は8.7億ドルの黒字となった。

7月の輸出(通関、ドルベース)は、前月大幅増加のあと-0.9%と減少したが、数量ベースでは+2.4%と大幅に増加した。品目別(数量ベース)にみると、ラジオが減少を続け、テープレコーダーも反動減となったが、自動車、合繊糸が引続き増加したほか、テレビが著増となった。

7月の輸入(通関、ドルベース)は、前月入着集中をみた原油の反動減を主因に

-12.1%と大幅に減少した(数量ベースでも-11.8%)。

なお、8月の輸出および輸入(通関、ドルベース)は、それぞれ+4.1%、+4.4%となった(数量ベースでは+3.6%、+6.0%)。

8月の円相場(対米ドル直物相場)は、月央にかけて米国金利が上昇するなかで軟化、その後一時反発したものの月末にかけて再び弱含み、結局246円75銭で越月した(月中5円25銭の円安)。

この間、8月の外貨準備は5.4億ドル減と久方振りに減少した(月末残高244.0億ドル)。

(昭和58年9月16日)